

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：21201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593209

研究課題名(和文) 看護における組織内合意形成に焦点をあてた研究成果活用の促進モデルの構築

研究課題名(英文) A model construction for facilitating research utilization focusing on consensus building of the nursing organization

研究代表者

遠藤 良仁 (Endo, Yoshihito)

岩手県立大学・看護学部・講師

研究者番号：00438087

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は合意を形成し研究成果の活用促進を図る看護組織の特徴を明らかにし実情に即した方策を構築していくことを目的とした。看護に関する研究成果活用の阻害要因についての半構成的インタビュー調査や看護管理者対象へのアンケート調査などから、合意形成を得ていくためには看護師の研究成果活用を推進する方策として、専門性の高い看護師をキーパーソンとして育成することと学位取得者の割合を高めること、そして、組織的にケア改善の手順の整備と会議の活性化と集団の意見をまとめるファシリテーション能力を向上させる研修強化といった組織的な取り組みなどの有効性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aims to describe the characteristics to facilitate research utilization and build consensus of nursing organization. We used semi-structured interview from nurses in the Tohoku region. Then, we surveyed nursing administrators perceive about barriers. Five categories were emerged including "A lack of key nurse leaders", "a mood which makes nurses are reserved", "Vagueness of procedure to suggest to improve a practice", "A lack of convincing argument", and "Difficulty in academic skill". Fourteen administrators of 26 hospitals employed undergraduate nurses. 【Innovation】 was a significant positive correlation with facilitating meetings. There was a significant negative correlation between the rates of recipients of undergraduate nurses and the scores of the Organization factor. The study's findings reveal key characteristics to overcome barriers by increasing in-service training of facilitating meetings, and increase undergraduate nurses.

研究分野：看護情報学

キーワード：研究成果の活用 合意形成 人材育成

## 1. 研究開始当初の背景

根拠に基づく臨床 (Evidence-based Practice) の実現のため、最新の研究成果を活用した看護実践が求められている。しかし、それを困難にする要因として看護師の時間の無さや研究能力の低さなどが指摘されている。

しかし、近年では看護師個人の能力だけではなく、看護師間の組織文化的な側面の課題も指摘されるようになってきた。つまり、看護実践は統一したケアが求められるため、研究成果の活用は、看護師個人のみで実現する訳ではなく、組織としての実践が重要であり、そのためには理念の導入から定着に至るモデル化が求められているということである。ところが、研究成果活用を組織に定着させる具体策は未だ明らかになっていない。そのため、研究成果の活用が促進されている組織の特性を明らかにしていく点から明らかにしていく必要がある。

看護組織については、近年の看護系大学・大学院の増加による高学歴化や専門分野に特化した資格認定者の増加は、組織構造に変化をもたらしている。仕事と生活を調和させ多様な人生設計を推進するワークライフバランスの考え方の広がりもあり、看護師の学歴、能力、価値観も多様化し、その変化への柔軟な対応が求められている。しかも、研究者が行った調査では、臨床看護師は「看護師が共に育つ職場づくり」、「組織的な合意形成」などを必要としていた。このことより、教育的な組織づくりの基となる特徴を明らかにする必要性が確認された。

以上、看護における研究成果の活用促進を図るためには、看護組織の合意形成を促す教育的な組織づくりと、共に成長することに喜びや価値を感じる看護師の育成を促す看護組織の特徴を明らかにし、実情に即した方策を構築していくことが急務である。

## 2. 研究の目的

(1) 我が国の病院において最も数が多く、一般的な傾向が把握できると思われる中小規模病院の課題を把握するため、東北地方の中規模病院を対象に看護師が認識している看護実践上の研究成果活用の阻害要因とその背景要因を明らかにする。

(2) 我が国における看護師の研究成果活用の阻害要因の特徴を把握するため、諸外国との結果を比較する。

(3) 今日看護職を対象としたさまざまな教育活動が実施されている。そこで、研究成果活用の阻害要因と現任教育との関連を明らかにする。

(4) 今日看護大学の増加等に伴い学位を持つ看護師が増えている。そこで研究成果活用の阻害要因と学位取得者の割合との関連を

明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 東北地方の中規模病院における看護実践上の研究成果活用の阻害要因とその背景要因

東北地方の中規模病院に勤務する看護職を対象に、郵送法による質問紙調査を実施した。調査内容は、(1)臨床経験年数、(2)看護の学歴、(3)日頃の学習状況(一ヶ月に読む専門誌数、インターネットを用いた情報検索)、(4)日頃の実践内容の根拠に疑問を持つ経験、(5)その対処方法、(6)研究成果活用の阻害要因30項目、および、独自に追加した6項目(研究の実践活用のリーダー不足、研究成果の職場内活用の手順・手続きの不明確さ、“研究”に対する苦手意識やマイナスイメージ、研究成果の情報収集不足、研究活用の意識の職場内不統一、人事における個人目標の未考慮)の認識についてである。各項目について、記述統計を算出し、項目間の関連を統計学的に検討した。

(2) 我が国における看護師の研究成果活用の阻害要因の特徴把握

研究成果活用の阻害要因は、BARRIERS SCALE が標準的に用いられる傾向があるため、我が国における独自の要素を調査するため、東北地方の病院に所属する看護職を対象に半構成的インタビュー調査を実施し、BARRIERS SCALE と比較した。

(3) 研究成果活用の阻害要因と現任教育との関連分析

我が国の標準的な特徴を推測するため、今回は岩手県全域の医療施設の看護管理者を対象に、郵送法による質問紙調査を実施した。調査内容は、(1)医療施設の特性(所在地、病床の種類、病床数)、(2)研修の内容として「研究能力向上を目的とした研修」「看護職自身の意欲向上を目的とした研修」「他者の意欲向上を目的とした研修」「会議の活性化とまとめる能力の向上を目的とした研修」の実施頻度、および(3)研究成果活用の阻害要因28項目である。研修の実施の程度については「頻繁に実施」～「未実施」を1~3点とし平均点、SDを算出し、「不明」は平均点の計算から除外した。研究成果活用の阻害要因は、「不明」の回答を除外した上で、「全く該当しない」～「強く該当」を1~4点とし、先行研究にて明らかになっている4つの因子(看護職自身の研究に対する価値意識や能力・自覚に関わる【Adopter】、施設の設備や組織としての研究を推進する環境に関わる【Organization】、研究の質向上に関わる【Innovation】、看護職が研究成果の存在に気づき入手できるプロセスに関わる【Communication】)毎に平均点、SDを算出し他の項目との関連を統計学的に検討した。

倫理的配慮: 看護管理者へ研究目的、方法、

匿名性、参加の自由と拒否する権利および参加（非参加）による不利益の無さなどについて文書を用いて説明し協力を依頼し、同意の意思確認は返信をもって判断した。なお、本研究は岩手県立大学倫理審査委員会にて承認を得て実施した。

#### (4) 研究成果活用の阻害要因と学位取得者の割合との関連分析

(3)に関連し、岩手県全域の医療施設の看護管理者を対象に実施した郵送法による質問紙調査において、所属病院における看護師数と大学を卒業もしくは大学院を修了した看護師数のデータから、学位取得者の割合を算出し、研究成果活用の阻害要因との関連性を統計学的に検討した。

### 4. 研究成果

#### (1) 東北地方の中規模病院における看護実践上の研究成果活用の阻害要因とその背景要因

##### 1) 回収数

86名にアンケートを配付し、22名から回答が得られた（回収率25.6%）。

##### 2) 対象者の特性

平均臨床経験年数は19.7年（SD9.3）、看護の学歴で最も多かったのは看護師養成所3年課程54.5%であった。購読専門誌数は月平均1.3冊、インターネットによる情報検索の頻度は月平均2.3回などであった。

##### 3) 日頃の実践内容の根拠に疑問を持つ経験と対処法

対象者の90.9%が日頃の実践内容の根拠に疑問を持つ経験を有していた。そして、その対処法としては「自分で調べる」68.2%、「誰かに質問する」31.8%であった。回答内容別にその手段や対象は、自分で調べる者では「専門誌」93%、「インターネット」80%、他者に尋ねる者では、「看護職の上司または同僚」100%、「医師」14.3%であった。

#### 4) 中規模病院における看護師の研究成果活用阻害要因の認識

研究成果を実践に活用する際、7割以上の看護師が阻害要因と認識していた項目は、「外国語論文は理解できない」(90.9%)、「関心のあるテーマについて現在どのような研究がなされているか情報収集が不足している」(81.8%)、「研究に対する苦手意識やマイナスイメージがある」および「論文を読む時間が無い」(77.3%)であった。

一方、「(その項目が阻害要因になっているのかどうか)わからない」と回答した項目の上位は、「文献では矛盾する結果が報告されている」(54.5%)、「たとえ看護実践を変更しても、その利点はごくわずかしかない」・「報告されている研究の研究方法は、不十分な点がある」・「研究から導きだされた結論や示唆は、正しいとは言えない」(31.8%)であった。

項目間の関連では、日頃の実践で疑問を持

つ頻度が多い者ほど「関心のあるテーマについて現在どのような研究がなされているか情報収集が不足している」の認識が強く（ $p=0.048$ ）疑問を「誰かに質問する」者ほど「研究に対する苦手意識やマイナスイメージがある」の認識が強かった（ $p=0.031$ ）。

この結果から、ほとんどの看護師は日頃の実践に疑問を持つ経験を有し、その多くが専門誌やインターネット検索、同僚に訪ねる方法などで疑問の解決を図ろうとする一方、情報収集の不十分さを自覚していた。また、約半数の看護師が「文献では矛盾する結果が報告されている」かどうか「わからない」と回答していることから、仮説に対する肯定的な結果ばかりでなく、対立する結果も含め多方面による情報検索に困難感があることが示唆された。そして、そうした認識の背景には時間的な余裕の無さや研究の苦手意識が関わっていることも推察された。

研究に関する情報不足を自覚できることと日頃の実践への疑問を持てることに有意な関連性が認められたことから、日頃の気づきを生かすことによって情報検索の技術を高めるきっかけを得ることは可能と考えられた。

以上から、看護実践における研究成果を活用した看護実践の促進には、日常のケアの振り返りや気づきを促すための機会や時間作り、関心のあるテーマの先行研究の読解などを通して、問題発見と論文読解能力の向上が重要であることが示唆された。そのためまずは個々の看護師が抱く英語や研究に対する苦手意識やマイナスイメージの軽減を図るための実践の振り返りや論文に親しむ取り組みを行い、自ら情報検索にチャレンジする看護師を支援していく必要性が示唆された。

#### (2) 我が国における看護師の研究成果活用の阻害要因の特徴把握

##### 1) 対象者

計6施設の21名の看護師を対象にインタビュー調査を行った。

##### 2) 新たな研究成果活用の阻害要因

インタビュー内容を基に意味内容で似た内容をカテゴリー化したところ、既存のBARRIERS SCALEには無い5項目が抽出された。すなわち、(a)スペシャリスト等の研究成果の情報収集や吟味、活用に高い関心を持つケア改善のキーパーソンとなる存在の看護師がいる、(b)他の看護師に遠慮の感情や職場に気軽に相談できない雰囲気があるとケア改善には起こりにくい、(c)看護師は、ケアの改善を役割として課され複数で取り組むことが出来、改善内容を普及させるまでの手順や方法が組織的に整っているとケアの改善が継続して行われやすい、(d)ケア変更を安易に受け入れない看護師の中には研究成果の吟味の不十分さや費用対効果の問題（経営への貢献の低さ）に気づいているこ

とがあり、むしろ必要な場合があること、および(e)患者への深い関心の向け方や論理的な論文の読み方や書き方といった、看護の姿勢やアカデミックスキルであった。

この結果から、専門看護師や認定看護師等、専門性の高い看護師がキーパーソンになり組織的な研究成果活用に影響している可能性があること、また、「遠慮」という感情を持つ職場の雰囲気の影響、改善のプロセスの明確化、研究成果の根拠や効果の吟味が不十分なまま活用される傾向があること、そしてその基盤となるアカデミックスキルが課題としてある可能性が示唆された。

### (3) 研究成果活用の阻害要因と現任教育との関連分析

#### 1) 回収数

97施設へ研究協力を依頼し、承諾が得られた35施設にアンケートを配付、そのうちの26施設から回答が得られた(回収率74.3%)。

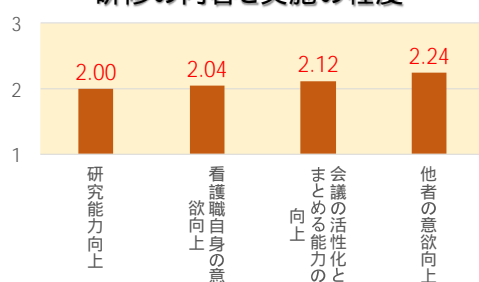
#### 2) 医療施設の特性

施設の所在地は盛岡地域16施設、県南地域5施設、沿岸地域5施設、県北地区1施設であった。病床の種類は、一般病床19施設、精神病床8施設などであった。病床数は100床未満6施設、100~199床10施設、200~299床6施設、300床以上4施設であった。

#### 3) 研修の内容と実施の程度

平均値が低い(研修頻繁に実施している施設が多い)順に、「研究能力向上を目的とした研修」(平均値2.00、SD 0.63)、「看護職自身の意欲向上を目的とした研修」(平均値2.04、SD 0.45)、「他者の意欲向上を目的とした研修」(平均値2.24、SD 0.52)、「会議の活性化とまとめる能力の向上を目的とした研修」(平均値2.12、SD 0.52)であった。

研修の内容と実施の程度



平均値が低い程、実施頻度が多い!

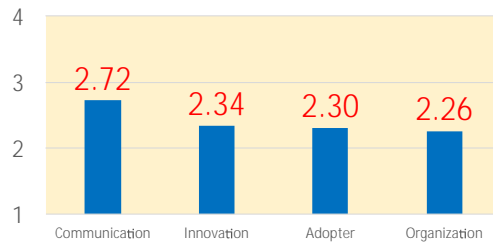
#### 4) 研究成果活用の阻害要因の認識

平均値が高い(研究成果活用の阻害となっている認識が強い)順に、【Communication】(平均値2.72、SD 0.60)【Innovation】(平均値2.34、SD 0.54)【Adopter】(平均値2.30、SD 0.59)【Organization】(平均値2.26、SD 0.58)であった。

#### 5) 研究成果活用阻害要因の認識と関連要因

各因子と有意な関連が認められた項目は次の通りであった。すなわち、「研究能力向上を目的とした研修」では【Adopter】、

### 研究成果活用の阻害要因の認識



平均値が大きい程、阻害要因の認識が強い

【Organization】、【Communication】との間にそれぞれ中程度の有意な正の相関関係が認められ、研修頻度が多い程阻害因子の認識が弱かった( $r=.466$ 、 $p=0.038$ 、 $r=.598$ 、 $p=0.004$ 、 $r=.484$ 、 $p=0.026$ )。また、「看護職自身の意欲向上を目的とした研修」では【Adopter】、【Organization】との間にそれぞれ中程度の有意な正の相関関係が認められ、研修頻度が多い程阻害因子の認識が弱かった( $r=.451$ 、 $p=0.046$ 、 $r=.519$ 、 $p=0.016$ )。「他者の意欲向上を目的とした研修」では【Adopter】、【Organization】との間にそれぞれ中程度の有意な正の相関関係が認められ、研修頻度が多い程阻害因子の認識が弱かった( $r=.629$ 、 $p=0.004$ 、 $r=.527$ 、 $p=0.016$ )。「会議の活性化とまとめる能力の向上を目的とした研修」では【Adopter】、【Organization】、【Innovation】との間にそれぞれ程度の有意な正の相関関係が認められ、研修頻度が多い程阻害因子の認識が弱かった( $r=.490$ 、 $p=0.028$ 、 $r=.538$ 、 $p=0.012$ 、 $r=.533$ 、 $p=0.033$ )。

### 研究成果活用の阻害要因の認識と関連要因

研修内容	Adopter 看護師自身	Organization 組織環境	Innovation 研究の質	Communication 入手プロセス
研究能力向上	$r=.466$ $p=0.038$	$r=.598$ $p=0.004$	n.s.	$r=.484$ $p=0.026$
看護職自身の意欲向上	$r=.451$ $p=0.046$	$r=.519$ $p=0.016$	n.s.	n.s.
他者の意欲向上	$r=.629$ $p=0.004$	$r=.527$ $p=0.016$	n.s.	n.s.
会議の活性化とまとめる能力の向上	$r=.490$ $p=0.028$	$r=.538$ $p=0.012$	$r=.533$ $p=0.033$	n.s.

本調査から、研究成果活用の阻害要因4因子は研修の実施と有意な関連が認められたが、その中でも【Adopter】と【Organization】は、今回調査した全ての研修項目と有意な関連が認められたことから、個人の能力向上や組織に関する研究成果活用の阻害要因は、多様な研修の手段で軽減可能であることが示唆された。

一方、もっとも阻害要因としての得点が高かった【Communication】は、「研究能力向上を目的とした研修」とのみ有意な関連が認められた。このことから実践に役立つ有用な結

果（文献）を検索する能力向上には、やはり研究方法等の研修が最重要かつ有用であることが示唆された。

そして、障害因子の得点が2番目に高かった【Innovation】は「会議の活性化とまとめる能力の向上を目的とした研修」とのみ有意な関連が認められた。この研修で表されるような、研究者間の合意形成に関する研修は、【Innovation】と唯一関連性が認められた研修であったことから、研究者間のコミュニケーションスキルを向上させる研修としても重要であること、さらに、実施頻度が他の研修よりも低かったことから、さらに充実させる必要があることが示唆された。

以上から、研修において「研究能力の向上を目的とした研修」のみでは、【Innovation】の影響を受けるバリアは軽減できず、メンバー間のコミュニケーションスキルを向上させ、合意形成の促進を図る研修の重要性が示唆された。

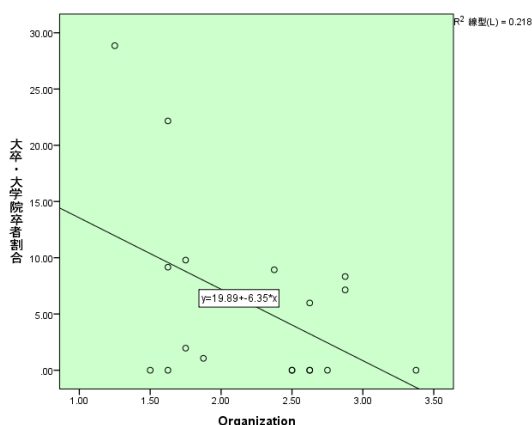
#### (4) 研究成果活用の障害要因と学位取得者の割合との関連分析

##### 1) 対象者

97施設へ研究協力を依頼し、承諾が得られた35施設にアンケートを配付、そのうちの26施設から回答が得られた(回収率74.3%)。

##### 2) 大卒・大学院修了した看護師の所属割合

大卒看護師もしくは大学院修了生が所属している病院は14施設(54%)であった。そして、学位取得者の割合は最大28.9%、最小0%、平均5.4%であった。



学位取得者の割合と有意な相関関係が認められたのは、【Organization】であった( $r = -.47, p = .05$ )。以上から、看護の組織的な障害要因には学位取得者の割合が影響する可能性が示唆された。つまり、看護組織における学位取得者の割合を高めることで看護組織における障害要因を軽減につながる可能性が示唆された。

##### (5) まとめ

本研究から、一般的な病院の特徴、および諸外国との比較による我が国の特徴、そして、現任教育および看護師の学位取得との関連

性が明らかになった。以上から、我が国において合意形成の観点から看護師の研究成果活用を推進する方策として、高い情報活用能力を持ち情報収集や活用可能性の吟味を推進する役割としての専門性の高い看護師をキーパーソンとして育成すること、そして、学位取得者の割合を高めることを推進することといった人材育成、そして、組織的にケア改善の手順・手続きを整備しながら、コミュニケーションおよび会議の活性化と集団の意見をまとめるファシリテーション能力を向上させる研修を強化するといった組織的な取り組みが重要であることが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

山内一史, 遠藤良仁: 認定看護管理者はTIGER Competencies wikiの看護管理者向けBaseline Informatics Competenciesを満たすことができる?, 第14回日本医療情報学会看護学術大会論文集, 査読有り, 2013, 170-173.

〔学会発表〕(計4件)

遠藤良仁: 東北地方の中規模病院における看護師の研究成果活用の障害要因と背景要因, 第5回岩手看護学会学術集会, 岩手県立大学, 岩手県滝沢市, 2012.

Yoshihito Endo: Japanese Nurse's Perceptions of Barriers to Research Utilization in Nursing Practices, The 3<sup>rd</sup> World Academy of Nursing Science, The-K Seoul Hotel, Seoul, Korea, 2013.

遠藤良仁, 伊藤収: 研究成果活用の障害要因の軽減に有効な院内研修は何か. 第7回岩手看護学会学術集会, 岩手県立大学, 岩手県滝沢市, 2014.

Yoshihito Endo, Osamu Ito: Nursing administrators' views of barriers to research utilization and relationship to their educational levels in the Northeastern provinces of Japan, 18<sup>th</sup> Integrating Sciences and Humanities in Doctoral Nursing Education, Taipei, Taiwan, 2015.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称:

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

遠藤 良仁 (ENDO, Yoshihito)  
岩手県立大学・看護学部・講師  
研究者番号：00438087

##### (2) 研究分担者

伊藤 収 (Ito, Osamu)  
岩手県立大学・看護学部・教授  
研究者番号：40320246

##### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号：